

光について

ここに訳出された『ひかりについて』は二十一世紀の生んだ翻訳集団であるYが発表して全世界へ広く知られることになった、中間言語「スミレコ」による作品である。一世紀近くもの間を結界と我々との中間言語である「スミレコ」の研究と解明に携わり、散発的ではあるが重要な示唆を行ってきたYが発見したこの物語は当時まったく信用されず、ジョーク説や暗号説などが小さく取り沙汰されたのみであった。しかしやがて少くない学

者がこの発表を正しいものだとして世界中に散布されている「スミレコ」から生成された証明を提出すると、『ひかりについて』は注目を集め結界関連の識者以外にも少なからぬ啓発を促した。そして韻文や散文の訳が数多く試みられ今日までに英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・イタリア語など多くの翻訳書が出たこの作品は、一般の人々においても広く読まれるに至っている。

博麗神社の居間から陽に照らされた庭先を宇佐見董子は見ていました。

立ち並ぶ塔と山林へ注がれる黎明を宇佐見董子は見ていました。

光景が断絶しています。まばたきすら必要とされなかった視界の変化へ彼女の頭が付いていけない間にも、ずいぶんりっぱな寺院や掃き清められた石畳が暁の金色をこつそりと呼吸していました。どこまでも続いている日本風の古い建物の連続に見覚えがあるとすれば董子の知る限り京都か奈良あたりなのですが、それにしてはビルがひとつも見当たらないのが氣になつて仕方ありません。意識が切り替わる前と同じ夏だとしても氣温が過ごし易すぎるようでしたし、そういうえば風の匂いもまるで空の上にいる時のようです。そして何よりもどうしてここへ自分がいるのか不思議でたまらなくなつたころ、あたりへ大きな陰が降りてきたのに董子は氣づきました。何か大きなものが頭上に浮かんだのだと考えた董子は体

ごと空へ振り向いたのですが、おどろいたことに彼女の目に写ったのは満天の星空だったのです。陰だと思っただのは夜で、あたりだけではなく世界をその暗い裾すそで包んだのでした。暁の色は全て拭ぬぐい去られて輝く月の銀がはらはらと降り立ち、尖塔の頂いたadakiや屋根の輪郭がぼんやりとした薄明かりで青めいています。

自分の細い指先や眼鏡に光る月の色をしげしげと見ている董子はもうすっかり慌てていたのですが、心の片隅では「どこかの妖怪にやられているのだろう」と静かに分析をして告げる声もありました。その声も次の変化を目の当たりにしてどこか遠くへ吹き飛んでしまいました。
が。

最初は炎だと思ったものです。先ほど朝から夜に移っ

た時のようにゆっくりと茜色よりも琥珀に近い色が世界を染めていくと、それがあまりにも濃い色になったものだから董子はいっぺんに不安になってしまいました。気温がずっと変わらずに快適なままでなければ何かしらの超能力を使っていたかもしれません。

やがて以前とは違う色の中に自分がいるのを董子は発見し、不安がくすんで溶け去ると驚くべき不可解な色彩の全てをその瞳は見ていました。磨きぬかれたその色。この上なく完璧な色を作りだす二つの色。何という綺麗でしょう。高い天には星と月と日が天の宝石となり輝きの粉を燃え立たせていましたし、それを受ける地上では黒翡翠や黒水晶や黒瑪瑙に遷ろう影がなめらかに流れていくのです。

幼児が空を見上げる時の瞳をして董子はじつと立っていました。その横で風が道端の花を揺らしたかもしれませんでした。

博麗神社の居間から陽に照らされた庭先を宇佐見董子は見ていました。ずいぶんと透きとおった顔をした彼女の対面で博麗霊夢は怪訝な顔をしています。いつものようにウロウロしていた董子を神社へかくま匿って無駄話をしていると、とつぜんこの外来人は目を輝かせはじめたのです。

「ねえ。わたし予知夢を見られるようになったみたい」
「あー？」

唸り声に近い声で返事をしながら、霊夢はその言葉が

正しいことを予感しました。

董子は幻想郷の向こう側からやって来るようになった少女です。おたがいの世界間には強い結界があるのですが、彼女は夢を使ってこの世界へ入ってくることができ、その中です。今も霊夢と一緒にいる董子は夢の中であり、それが別の夢を見たという入れ子構造は少しばかり複雑すぎるように思わず霊夢は眉をひそめたのでした。

「不吉な夢じゃないでしょうね」

「ううん。素晴らしい景色。昼と夜が同時に存在してた」
「私からすればものすごい凶夢なんだけど。天変地異のまっただ中じゃないの」

「そういうのじゃないから。私の国や幻想郷にある古いお寺によく似た、というかあれは寺ね。それがずらりと

並んでた。目の前で太陽が昇り始めて朝方になっていく
と思えばアツという間に夜になって、しばらくすると混
ざったの」

「夢の中で時間が狂うなんてよくあることだけど。にし
ても太陽と月が混ざるのはありえない」

「時間の流れも普通だったように思う。早送りみたいに
朝から夜へ進んではいたけど、空気の流れとか音とか、
そういう気配はすごく静かで普通だったもの。そこがお
かしいと言えはおかしいんだけど。どこかで体験した気
がするのよねえ。あっち側で。」

記憶を掘り出そうとして最後の方は聞き取れないほど
小さな声になっていく堇子は言葉を失っていくようでも
あり、ついでに唇を塞ぐつもりだったのか霊夢のお茶請

けをつまもうと指先を伸ばします。その寸前で小皿に積んでいた金平糖を全て摘み取った巫女はコロコロと掌の中で転がしました。

「外の世界が天順の操作をできるようになったなんて聞いたことないわ」

「できないからね。でも何処だったかなあ」

首を横に振ってから董子は昼夜の混在した時の色彩について熱っぽく説明を続けましたが、さっぱり通じない霊夢は無関心に聞いてからぶっきらぼうな声を出しました。

「予知夢っていうのは感覚か。それとも根拠があるの」
「感覚」

「あんたの神通力——超能力だっけ。色々とゴチャゴチャ

やしてるから効き目があるかわからないけど、お祓いしてやつてもいいわよ。後払いで。気配は感じないけど、見た夢がやたら芝居じみてるから憑かれてるかもしれない」

あれほどの物を作り出せる妖怪なんているわけもないと霊夢の言葉に反論すべく口を開けた董子の動きが止まると、眼を見はりながらゆっくりといつもの偉そうな笑顔になった。胸を張りました。

「わかった。やっぱり予知夢だった」

「あー？」

再び唸り声を上げた霊夢を見て董子は得意満面です。

「芝居だったのよ。私が見たあれは。ショーよ。幻想郷にはプラネタリウムってないの？」

「プ……？ ああ。 星空を動かすやつね。 良かったわアレ」

「あるじゃない。 それよ。 それの亜種。 いいえ進化系ね。 なんだって露天でやってんだもの」

疑わしげな霊夢をよそに、次第に熱いものが董子の顔へ湧き上がってきました。

「見渡すかぎりの景色をいっぺんに変えていたし、どれだけの技術があんな真似を可能にさせていたのかしら。 そもそも昼夜の合成色なんてどうやって見つけたの？

光量の単純な合計だと昼に夜が塗りつぶされるだけだし」

「長くなるなら帰ってからにしないよ」

「だめ。 世界史なんてどうでもいいわ。 あのね。 私にできると思わない？」

発想が本人の頭の中だけで八艘飛びをしてしまつてゐるためか理解できない質問を投げかけられた霊夢が珍しく絶句していると、何を納得したのかニタニタしながら董子は頷いて座布団の上に立ち上がりました。

「多少の未来がなによ。私には私のやり方ができるもの。私にだってあの色を再現することができるはずよ。天を動かすなんて無理なことをせずとも、未来に埋まった秘密を暴きだしてみせるわ！ 世界の誰よりも私が先にあの色を作り出してみせる！」

興奮した董子のきらきらとした瞳が、まるで矢をつがえて震える弦のように輝いているのを霊夢は見つめています。やがて鼻息も荒いまま座り直した董子が霊夢へずるそうな目をして言いました。

「頼みがあるんだけど。アドバイスとかしてもらえない？」

「何の」

「結界で空間を区切るの得意じゃない。あれが応用できると思うの。他は私がやるし、すごく綺麗なんだから。一緒に見ようよ」

「帰れ」

「お披露目は神社でやるからさ。人も集まるよ」
「えっ」

体を伸ばして霊夢の掌から金平糖を一粒さらって噛み砕く堇子は満面の笑顔です。外では陽が静かにたゆたい、か細い何かの鳴き声が陽炎のようにふわふわと通って行きました。ちょうど太陽がその日の下り坂を行くころ。

葉の端をわずかに枯らした花が浮き立って見えたように
思われます。

それからよく二人は並んで外へ出かけるようになり
ました。董子の夢だけが知る色を作りだすために幻想郷を
渡ってみることにしたのです。最初に彼女たちが探した
のは。プラネタリウムを作り出した河童たち。空中から見
つけたある沢の中で何匹か固まっている中に知り合いの
河童がいるのを二人は見つけました。

「動くな」

降り立った岸边から霊夢が一声投げると、流れる水に
跳ね返ってきらきらと瞬く日光のゆらぎを服や膚はだの上に

映す河童たちの表情が緊張でかたまりました。中でも巫女の視線が自分に向けられているのに気づいた河城にとり、水から上がった方が良いのかそのままの方が良いのかわからなくなってしまう、胸からお腹のあたりを浮かせたり沈めたりして川の流れにぎぶぎぶ波を立てていきます。

「聞きたいことがあるからちよつと来なさい」

「へいへい」

おぼつかない足どりの河童を連れて岸边から少しばかり陸へ入ったところで董子は立ち止まり、にとりへプラネタリウムをどのようにして作ったのか聞きました。

——商売道具のことが話せるものか。頭の皿が干からびたって言わないぞ。

靈夢の顔色をうかがいながらも河童は首を横に振ったのですが、昼夜の混ざった光景の話を堇子が話して聞かせるとなかなからぬ興味を示しました。堇子がプラネタリウム自体の原理はすでに知っていたこともあり、機材の動力や構成を軽く話すのと引き換えにその色について大変しつこく質問してしまうと仲間を置いたままで河童はそそくさと住処へ飛んでいくのでした。

「なんで話したのよ」

不満そうな靈夢の視線が堇子に刺さります。会話の途中で何度も河童を黙らせようとした彼女をずっと堇子は止めていたのです。

「別に減るもんじゃないし。目的通りにこっちの聞きたいことが聞けたじゃない」

「今ごろあの河童はアンタから聞いた景色を再現する機械を作り始めてるわ。小癪だけど、ああなるとあいつら見事なものよ」

「大丈夫。絶対に作れやしない。だってあの色を見たことがあるのは私だけ。太陽と月の光を混ぜればいいってものじゃない。いくら詳細に教えてあげたところで、言葉にできない美しさをどうやって作りだすやら。そのうち自分の目で確かめるために未来へ行こうとタイムマシンを作りはじめるかしら。どっちにしろ脇道へ逸れてサヨナラよ」

「相変わらず調子にのるんだから」

それでも霊夢は笑ったのです。ざわめく夏が闌たけて秋に近づいていくなかを二人は行きました。幻想郷の一角

から一角へ。昼も夜も。知つて知られて。

ひとりの時もありました。烈々と燃えさかる庭燎にわびを横目に豊聡耳神子から太陽の落とし方を董子は習いましたし、幾筋も玉を結はたんでこぼれる汗をぬぐいながら茨木華扇から長い布を機織はたおるような説教を享けました。

董子の来なかつた日の霊夢は外へ出たりせずのんびりと過ごしているようでしたが、それでも神社へ顔を出した秦こころから独自の感情同在論を聞き出していたり、まあそれなりに協力はしていたようです。

身体に染み入るような鈍い熱気をはらんだ夕刻に博麗神社の参道で董子と顔を合わせた魔理沙は、手段や方法を問わずに不思議なプラネタリウムについて聞きまわる彼女を見て「信じられんほど素直だな」と言いました。

何しろ知り合ったばかりの時の董子ときたら。自分のことばかりを考えて幻想郷へやって来ていたのですから。

「答えを知るのに素直もなにも無いと思うんだけど」

空へうそぶくように董子は言いました。

「そりゃあそうなんだが。お前はもつとこう、自分の知識や経験ばかりアテにするタイプだと思ってたよ。特に他人の意見はお断りっていうやつだ」

「お断りよ。いらない意見はね。あつちじゃ今でもそんなに変わってないけど、こつちじゃ別。できる事とできない事が同じくらいにあるのは幻想郷に来てわかったから、今回はできる人に知識を借りることにしたの」

「いい心がけだ。発想外はどんどん吸収していくといい」

「貴方が言うと言得力があるわねえ」

ふいに魔理沙の言葉へ割り込むようにして声が伝ってきました。

董子が振り向いた先にいたのは見慣れぬ格好の女性です。鳥居をくぐりながら日傘をさして微笑みを向けるその姿は花のよう。女を——風見幽香を見た魔理沙はそうだろうと笑います。しらじらと燃える皮肉げな瞳が交わる理由を董子は知りませんでした。ちょうどそこへ神社から霊夢もやってきて、無表情に近い顔で歩いてくると三人より少し離れた場所で立ち止まりました。

「珍しいというより用があつて来たって感じだけど」

霊夢が饑ひだるそうに言うと幽香は小さくうなずきます。

「名前の花が聞こえたものだから。呼べば応いえはあるものよ」

妖怪の形容しがたい視線の先にいた董子は思わず頭をのけぞらしました。彼女にとって幻想郷はきれいな物で溢れすぎていたのです。強くも細くもない烟雨けぶりが大地を濡らすようにして幽香は言いました。

「注意しに来てあげたの。夢で遊ぶのはやめておきなさい」

「いやよ」

「そうよ」

反発する董子と霊夢でしたが、言ったあとで霊夢の方はきよとした顔をしました。駆けるように進み出た自分の言葉が本人にも早すぎたとしてもいうようなその顔に、董子も魔理沙もあたりを憚はばるような神妙な気持ちにさせられてしまい、ただ滴るような幽香の笑みだけが深

くなつていきます。

「残念。でも花のお嬢さん。見たい夢を見ることができると信じているのならやめておきなさい。こっちは警告よ」

夕日に影を落として黒ずむ幽香を魅入られたように黙つて見る董子の瞳をながめて霊夢が口を開きました。

「覚えがあるつて顔してるわね」

隠すつもりもなかったんだけど、と断りをいれてから董子が話すところによると、彩色を探しはじめてから今まで幻想郷へ辿りつけぬ眠りが三度ほどあったのです。何も見ぬ夢。眠りのための眠りに開かれた洞戸へ落ちこんでいった日が。

「そろそろ偶然ではないと思つていたのだけれど、もし

かして原因がわかったりする？」

「わかるわよ。そいつは。昔とった杵柄ってやつでね」
董子の声に答えたのは幽香ではなく霊夢でした。夕焼けの沈んだ透明を梳くようにふわりと傘をまわして揺らす幽香はまるで自動的です。

「昔のことはともかく。花の貴方に免じて教えてあげましょう。原因は貴方が目覚めた予知夢のせいよ。幻想郷に訪れるための夢と未来へ訪れるための夢は別の色をしている。片方を見ようと努めた貴方がそちらの色へ染まり、もう片方を忘れていくのは当然のこと。今はまだ両方が混ざっている状態だけど続けていけば幻想郷の色が薄まっていくでしょう」

「予知夢を見るのをやめろってこと？」

「夢で遊ぶなと言ったでしょう」

警告を繰り返した幽香を見る堇子の目の色はそれでも変わりません。刻々と日中の熱が乾いていく地面の上で、風に撫でられた大輪の動きを真似るようにして幽香は首を傾げます。

「このままだと夢を経ずに再び非正式な方法で幻想郷へ渡ってくることになるのかしら。そうなるとまた紅白と白黒がてんやわんや」

「今でもネズミのようなものだけど、それは勘弁こうむりたいわね」

霊夢にじろりと見られた堇子は軽く舌を出しました。

「方法がないではない。夢見の周波を他人へ移すの」
指をクルクル回しながら幽香は説明しました。方法と

しては深い場所へ。己ではなく人間という種としての夢を見て、生まれ死に生まれ見る夢のさらに奥から他人の夢の衣を借りて幻想郷に来ればよいと言うのです。皮を被る狼のように。山姥のように。

「そんなことできるわけ」

「堇子」

言い返そうとした堇子の声をさえぎって止めると霊夢は腕を組んで頬を掻きました。

「そっちはなんとかしてあげる」

珍しい物を見たと言わんばかりに驚く堇子と魔理沙の顔が向き合う横で微醺^{びくん}を帯びた吐息を洩らした幽香に対して、罵るように眉根を歪めて苛立った口元が霊夢から向けられます。

「ギフトはここまで。見返りは夢見るような景色を私にも見せてもらおうかしら。桃源郷より素敵な場所を期待しておくわ」

眼に止める暇もあればこそ。来た時と同じように傘を揺らして帰っていく妖怪を見送ったあと、居座ろうとする魔理沙を出し物のお披露目当日まで秘密だと弾幕ごっこで追い払ってから再び霊夢と董子は飛び出していきました。

今度は別々に。幻想郷の一角から一角へ、もしくは現実世界の一点から一点へ。西へ東へ。片時から片時へ。

ひどい秋霧が湧き立った日に霊夢は目の前をかきわけるようにして空へ浮かび命蓮寺へ乗り込むと、雲居一輪をダシに使って聖白蓮から無意識に関する説教を引き出

しましたし、他日では無為を制御するための理論として枯れた緑蔭のなかをフラフラしていた物部布都に得意の風水術を見せびらかすよう仕向けました。根城を強襲して逃走する少名針妙丸を追いつめると小人が以前に出向いた目的の場所を聞き出し、準備を整えてからこっそり地底へ出向いてようやく霊夢は探していた妖怪を見つけ出しました。

「あれ。わたし何もしてないのに」

柱廊群が立ち並ぶ陽の届かない伽藍の底で霊夢に真正面から見据えられた古明地こいしは不思議そうです。

「アンタを見つけるのに色々やったのよ」

沈黙の礎石から削りだされたような薄ぼんやりした色合いの何かを、集中力によって蓋をした目で見つめなが

ら命名決闘用のカードを霊夢は取り出します。

「遊ぶの？ いいよ」

ひらりひらりと揺れる無色の影をもつれそうになる瞳で追いながら霊夢は最後の賭けを口にしました。博麗の巫女が賭けを行えばどうなるのかを知っている者にとっては退屈な一瞬だったでしょう。しかし霊夢にとっては大切な一瞬だったのです。

「今日は負けた方が勝った方のワガママをひとつ聞くことにするのはどうかしら」

「いいよ」

こいしの姿がハッキリと霊夢の目に映ります。もう迷うことはありません。地底で色彩と線形が咲き誇ります。こいし狩りが始められたのです。

幻想郷へゆくための眠りに身を委ねづらくなつた董子は起きている時間を増やして、その間に本を読むようになりました。ひとつ気がかりなことを見つけたからです。

幻想郷にいる知り合いの藤原妹紅はとても長生きだったので、昼と夜を混ぜるようなまじないや現象を知らないか聞きにいったところ『何かあつたような気もするが覚えてないなあ』と返答されたのがきつかけでした。

最初は長い年月の中で飽和して曖昧になったり混ざりきってしまった記憶を覗いてみた妹紅がそう答えたのだらうと董子は思い、彼女の歩んできた歴史にヒントがあるかもしれないと手当たり次第に古い記録を模索してい

きました。そしてその作業が無意味な結実に終わろうとしているのに感づきはじめてころ、堇子は別の切り口を見出していたのです。

そもそも妹紅は昼と夜の重複した光景など見たことがないので。ならばどうしてあのようなことを言ったのでしょうか。

長い年月に呑みこまれて溶け合った人の記憶や心から浮かぶ蜃気楼の一欠に存在したことのない昼夜の融合があるとするならば、それは長期間に見続けてきた同じ光景の思い出を夢想の中で勝手に溶かして作り上げたものではないでしょうか。

ひとつの風景を重ねて。重ねて。溶け去るまで重ねてから一枚を抜き出せば、あの光景が成し遂げられるので

はないか。昼と夜を混ぜあわせるのが不可能であつても一週間を合わせた光量の平均は取り出せないのか。一ヶ月で増減する月の光と太陽の煌めきを交錯させた先に答えはないのか。一年で変わる空の高さが光を伸ばしたり潰したりするのだろうか。

人気のない図書館で定点観測に関する本を読みながらいつの間にか舟をこいでいた董子は、ふとした拍子に自分が博麗神社の裏側に立っているのを見つけるのです。そして向こうからなにやら成し遂げたのか、満足そうに歩いてくる霊夢へ向かつてこう言うのでしよう。

「ねえ！ この神社に百葉箱とか置いてないの！」

季節がひとつ歌うころ。もしくはふたつ振りかえる程度の日々が過ぎたころ。幻想郷と外界を董子が行き来す

る回数はすっかりもとに戻り、錦紗織りから特定の綾目を探しだすようにして予知夢を見るタイミングも多少の選別ができるようになっていました。両方の夢に対する支配が強くなつていく董子は以前に何とかすると言つた霊夢へ処方は何を行つたのかを興味から質問しましたが、こいしが少しだけ董子に細工をしたからだという以上の説明を彼女はしようとしません。

その日はよく晴れた透明な冬の空が広がっていました。点々とした斑ふになつて風に流されていく一掴みの雲はさして形を変えませんし、葉を落とした樹の枝は風に揺られてもささやきほどの音を漂わせるのがやつとです。

温かげな物が見えぬはずの景色において、博麗神社の境内だけが別だったのです。神社の広場に立てられた櫓

の上で箱をいじる董子の顔からは白い息がもうもうと吐き出されていて、その下に群がって見上げるたくさんの人垣のあいだを賽銭箱を持った霊夢が右往左往しています。完成した光を見せる準備をしているのです。

やがてすっかり最後まで整えてしまった董子は箱を置いたまま立ち上がると目をつむって、自分の内側にある回廊を歩き始めるイメージを描きました。箱のなかにはいくつかの力ある石が——先日到大騒ぎを起こした石が入っています。まわりのざわめきが大きくなり、だんだんとそれが萎んでいつてちりちりとした音になったころ、すでに董子の意識は外界から切り離されていたのです。

董子が探り当てた結論は数百年の昼夜を全て重ねあわせ、そこから求める光を取り出すというものでした。長

い時間を経ながら妖怪になることなく力を含み続けてきた物質がすでに自分の手の中にあつたのは彼女にとつて幸いであり、あとは理論と実行を繰り返すのみでした。

己の全力が齒も立たない事態は幻想郷での一騒動を筆頭にこれまでもありましたが、思索そのものが通用しない日々は新しい風を董子の中に誘い、理論は空論であることや実験から答えを得ることを董子に教えていったのです。

——机の上で全てを設計できればどんなにか良かっただろう。

あらゆる春夏秋冬があたりを流れていく意識の回廊を巡り歩きながら董子は思います。そうすればこれまでの失敗や努力は経験せずに済んだものであり、完成が遅い

と霊夢に小言を言われなくてもよかつたのですから。

少女の心が回廊を曲がっていきます。右へ。左へ。細やかな足で歩きながらイメージするのは方陣です。形式です。音韻です。霊夢から教わった結界に必要なエッセンスと、二人で一緒になつて考えた結界図をイメージして歩きます。遠くのものが近くなり、明け方と夕闇で携えた董子の思考がふたつながらにかき立てられていきます。結界について霊夢は言いました。巫かんなぎとは神の口であり手であり神であると。

机上の空論で完成させるということは神に近づく努力であろうかと董子は思うのです。そして自分は永久に神にはなれないとも知っていたのです。

あたりに一年が薫ってきました。磨くようにして頬を

撫でていく風は鋭く冷たいものですが、額に投げかけられた陽光は暑く押し付けようです。川床にきらめく紫水晶と翡翠の光が視界の横をよぎっていき、芙蓉の香りと土の感触が董子の足裏で形を変えました。

回廊の綴れ路を少女は歩いていきます。ピラミッドの熱砂を。ナスカの高い空気を。ストーンヘンジの建造式を。黄泉比良坂にくべられた臭いを。地獄谷の眠りを。バベルの頂上を歩きながら董子は己を剥がしていきしました。空論においても組み立てられることのなかった瀆神の塔。幻想郷を歩きまわり、霊夢が歩きまわってくれた言葉を積んで結論にたどり着いたことに董子は初めて感謝を覚ことばえました。そして笑ったのです。ひとつとして同じ石材のないバベルに立っている自分を笑いました。

彼女の道程はひとつの箱を描いていました。細い線の立ちこめるその箱を自分のイメージが完成させると、堇子はそこから自分をすべて取り除きました。残されたのは石に含まれている数百年の光景を内包した箱であり、相對するように立っている自分を投影した堇子は手を伸ばしてそれを掌へ収めてから、織り込まれたひとつの模様を指で引き抜きます。この動作は結界の概念を用いた空間の切り取りだと霊夢から彼女は聞いていました。

無言のイメージが指を走らせるのと同時に櫓の上へ立った堇子は目を開き、あたりの空間へ指を使って自分の中で強烈に焼き付けた模様と線をなぞりました。それを見ていた霊夢は賽銭箱から手を離すと、観客がすっぽり収まるくらいの広い結界を張ったのです。

そして光が満ち溢れだしました。最初は炎だと皆が思ったものです。茜色よりも琥珀に近い色が世界を染め、ついには見たことのない色彩の全てを見ていたのでした。何という綺麗でしょう。

観客のざわめきが歓声に変わって董子に群がると、美しい汗をにじませながら誇らかな昂ぶりをひそめた笑みで少女は応え、顔の中に靈夢を見つけるとお互いだけに通じる悪戯っぽい表情を浮かべました。

観客に混じっていた少数の妖怪の中の一人が言うことには、海に向こうに浮かぶ蓬萊で咲く桜花がこんな色だったかもしれないということです。

「結界はすごい技術だけど、未来はきつと別のものを使
って制御しているのね。これから私はそれを見ていくん
だから」

月陽圏のプラネタリウムを成功させた夜、博麗神社の
参道で董子がそう言ったのを聞いていたのは霊夢だけで
した。光景を楽しみながらの祭りは再現時間の都合で実
現せず、そもそも成功するかどうか定かではなかった二
人は準備すらしていなかったのです。宴についてもおな
じことでしたし、事後に董子のまわりへ集まって質問ぜ
めをあびせる好奇心旺盛な人間はやんわりと返され、妖
怪は全て霊夢に蹴散らされ、その中へ魔理沙もいたため
に今夜の神社には二人がいるだけだったのです。

董子がそろそろ現実へと帰る時間となり、なんとなく

建てられたままの櫓を見ながら二人は別れることになりました。

「あっち側で再現するつもりはないの」

霊夢の問いに董子は肩をすくめます。

「どうやって？ 手助けが必要なのに超能力なんて私しか持っていないんだよ。いえ。他にいたとしても見つかるまでが大変だし、仲良くできるかどうか分かんないし」
「仲が良くなくてもなんとかなるんじゃない。私とアンタみたいに」

「そこは訂正する。でも無理。皆が使えるようになる物じゃないと普及なんてしないんだから。あっちは」

しばらく黙って董子は辺りを見ていました。昼の光景を思い出しているのでしょう。その視線は結界の張られ

ていた場所から上空に翔^かけあがつていきます。

「楽しかった。霊夢は？」

「そうね」

そっけない返事に呆れたような笑みを浮かべて董子は目をつむりました。霊夢がまばたきを一つする間に彼女は消え、そこには古びた夜の暗がり広がっています。天心に上りつめた月と、冷たい軌道を回る星光群。厚着を通り抜けてくるようなそれ以外の何かを霊夢の膚は感じ取りましたが、辺りに散乱する昼間の秘術の残り香が微風に運ばれていたのでしょう。襟巻の隙間を塞ぐように動かしてから、身を縮めて霊夢は神社の中へ帰って行きました。

そしてたぶん、ここがぎりぎりの境目だったのです。

堇子の予知夢へゆるやかに黄昏の光景が混ざりはじめたのは。

昼間に意識して見る予知夢ではなく、何かの拍子に入り込むようにして彼女を奪っていく予知夢はいつも不安になるものを少女に見せました。

例えば地平線いっぱいには赤錆びた夕日が潰れ落ちていくとします。緩やかなうねりと風紋が目の錯覚のように延々と広がる砂漠がどこにあるのか堇子には見当もつきません。不安な足元にも風のなかにも答えはありません。さらさらと砂の零るふような音をたてて天から微細な粉が落ちてくるのは、天の底がひび割れている連想を堇子に与えます。小暗い真紅は世界中を夥しく染め上げているのでしょうし、かといってどれほど長くこの場所へ居た

としても決して黒赤が色彩から抜き去られることはないように思えてなりません。時おり不穏な影のような物が砂丘の隅で動いたような気もするのですが、その形を生物だと認めたくない董子は決して目をそちらに向けることなく、夢が覚めるまでじつと立っているのが常でした。

例えば断続的な幾何学の熱夢じみた円形舞台と直方体が林立する植物群の中にとします。遙か遠くまで蛇行する大木の大河を睥睨しながら歩きまわる董子の目は珍しげにキョロキョロとしているのですが、よくみると植物を支える石柱は崩壊した人造物であることが見て取れましたし、地面を覆う根や羊歯の間から覗くのは舗装された路（かいせん）のように滑らかであったのです。色濃い緑は執拗な疥癬（かいせん）のように繁殖した悲惨の侵犯図のように見えて、

腐土と埃と生殖の放埒な匂いの中で景色の隅々から文明の断片を受け取れるようになった董子は遂に一步も動けなくなり、風の音に小さく震えながら目覚めるのが常でした。

極端な夢だったのです。彼女が新しく見るようになってたものは。変わらずに見ることのできた科学未来とはかけ離れている崩れた世界の予知夢では、体系の大きく狂った混沌もしくは秩序が映っていました。

そしてこの頃からひとつの噂が現実世界で広まりつつあったのを董子は知りました。都市伝説のひとつとして麦の新穂のように国中で満ち溢れながら人々の舌から舌へ踊っていく噂の瓶のなかへ見知った言葉があるのを見つけたとき、心や魂と言われがちな何処かを引き裂かれ

たような気が董子はしました。

—— 結界。

形式で組まれた空間の中に特別な力が働くと噂は言っていました。さして新しくないこの中古の都市伝説はどうしたわけかいつまでも消え去ることなく、それどころか加速的に信じられていくようになりました。科学的に解明できないにも関わらず多くの人が信じていく状況を、自らの不安定な予知夢を相談するときの茶請け話として幻想郷を訪れた董子は霊夢へ話したものです。

好みに合った新しい予知夢の内容や星へ旅立った人類を夢で探しだす抱負だのを語り合うその会話を、じっと息を潜めて見つめる耳がいくつもあることに彼女たちは気づいていませんでした。

耳の持ち主たちはそれがどういう事だかすぐさま理解しました。つまり宇佐見堇子が結界の知識と応用を持つて人間の集合知を行き来したことで、結界の实在が伝染したのだと。彼らの群れは貪欲です。利用できそうなものが知れるとすぐにそれを共有して人々の脳や魂に流し込んでいくのですから。

古来に妖怪や神々が恐れられ信じられていた時は大いに役立ったものでしたが、今回に限って言えば逆でした。広がった結界への興味は解明と体系化を促さずにはいられず、やがて普遍化して様々な部分へ応用されていくことでしょう。その途上で幻想郷という結界によって分け隔てられた場所が見つかってしまえばどうなるのか分からない者がいるでしょうか？　そして堇子が見るように

なった予知夢も頭の痛い問題でした。

彼女たちが話し合い解決策を練りあげて決定されたことはやがて博麗の巫女へと伝えられ、董子へのメッセンジャーとして霊夢自身が願っておもむいたのは浮腫んだ月の夜でした。二人の少女が出会ったのは博麗神社の裏手にある広場で、くすんだ黄色を帯びた光線の真下に神域は設えられています。降る黒金の中で挨拶の代わりに足先へ巫女の針をなげうたれた董子は全身を静止させて霊夢を見ており、気配の凍結あるいは歯車が刻む沈黙を顔の下に隠した博麗の巫女の無表情が朱唇を動かしていきました。

「私に与えられた時間は一度だけだからアンタに警告しておくわね。二度と私たちの前に姿を現すな」

豊かな絶滅は喋りつづけます。董子の夢が人類に広まり彼らが結界を手にしつつあることを。そのために幻想郷の未来が危険に陥るかも知れぬことを。突然言い渡された言葉が董子の中にある傾斜を転げ落ちるまでには時間が必要でした。そしてそれを受け入れて対応するまでの時間が用意されていない不条理に董子は慄^{ふる}えたのです。口から出てきた言葉は疫病^{えやみ}にも等しいものでした。

「そんなことはない！」

「これから百年後のことであつてもそう言い切れるの。その頃にはアンタも私も生きちゃいないだろうけれど、妖怪たちと外の人間たちの研究は別」

「私に關係あるもんか！　自分が死ぬほど先のことなんてどうして考えなきゃいけないの！」

「アンタが先に踏み込んだからよ」

あ、と自分の声が鳴るのを董子は聞きました。納得でも了解の声でもありませんでしたが、何かおびたらしい物を見たように思ったからです。彼女は賢かったのですから。心に広がる言いようのない虚ろを振り払おうと董子はスペルカードを取り出しました。半ば無意識ではありましたが、どうにか霊夢に自分を知ってもらおうとしてのことでした。それが意志を通すために作られた一方的な遊戯だったと董子が思い出したのは、ずいぶん後になってからのことです。

応えるために霊夢も同じ数のカードを取り出しました。そして瞬きをした董子に見えたのは、霊夢の横へ出現していた多尾を持つ人型のシルエット。驚きもう一つまば

たきをした彼女の目に写ったのは別の人型です。それぞ
れが董子の取り出したのと同じ数のスペルカードを彼女
に見せています。土が踏みにじられる音で背後を振り向
くとさらに別の少女がスペルカードをもっています。

何かが煮える音。風が終わる音。音が糸をひく音。陰
に陰を接木する音。その全てが何かしら人の形をしたシ
ルエットを生み、その全てがスペルカードを董子へ向け
て見せびらかしてくるのです。蒼白になった董子の視
線があちこちへ泳いでいると足先へ再び針の突き立つ高
い音がしました。

ついに身をひるがえした董子は影たちの群れから抜け
出そうとして宙を走りだし、接触と置き去りにした音へ
の恐怖で顔を歪ませながら木立の中へと飛び去ると行き

先も思いつかないまま、ただ逃げるためだけに進み続けました。擦過音をたてて唸る木々のあちこちに冷や汗を吹き出しながら、やがて追つてくる気配がないことに気づいたとき彼女が浮かんでいたのは枝葉の隙間から大きな月光が降り積もる場所でした。光柢の外側でなま暖かい闇は墨のようによどんでいます（季節は冬だったはずでは？）。

燃えるようになっていゝる肉体と精神を落ち着かせようとした堇子へ声がかかったのは、光の底へ降りて土を踏みしめた瞬間だったでしょうか。

「まだ話は終わっておらん」

木々の暗がりから投げかけられた声はひとつの羽根に触れられたほどの軽さだったために堇子は逃げ出さず身

構えるだけの余裕が生まれ、暗闇の揺籃ようらんから出てきた二ツ岩マミゾウと対峙することができました。

「聞け。儼らは結界の知識を外へ流すことにした」

煙管を離れた化け狸の口から白煙がゆらゆらと揺れ、そこに月の光が白い矢となつて二本突き立ちました。

「このまま結界を制御する手段も知らずに滅んだとあつては幻想郷も無事ではすまんからの。まあ火口から火が灯されるまでの間に多少は朽ちる部分も出てくるじやろうが、おそろくお前さんの社会は滅んだりせんじやろう」

再びマミゾウの口から吐かれた煙が広がり、光の矢が四本に増えました。堇子のかすれた声わたしたちが問います。

「朽ちる？ そんなに危険な境界を人間は開くつていうの？」

「いいや。じやが手妻が未熟とあれば手指を傷つけるのが道理よ。儂らはその傷が心の臓に達するのを防ぐために少しばかりコツを教えるだけのこと。お前さん方が決して幻想郷に達することのない理のみを選んでな」

煙管の口から葉の焼ける音が立ちます。昇る紫煙の向こう側で狸の目が炯々^{けいけい}と色めいています。

「結界を知識として受け渡しができるようにしたあと、塔を組み立てるようにして結界の学問を人間は発展させていくじやろう。常のごとく。見果てぬ天を指し示してやれば、知識の土台のさらに地下へ妖怪が潜んでいることなど気づきません。伸びきってしまえば土台のことなど忘れてしまう。雛鳥へ飛ぶことを教えてしまえば水の中で生きようとはせんようにな。こうやって事の次第を

話すのは別れの駄賃だと思ってくれ」

一服するあいだに返事がなかったので、マミゾウは続けて言います。

「知識の渡し方は夢を通すことにした。お前さんにならったそうだ。宇佐見堇子」

今までと違う声で名前を呼ばれた堇子の顔が青くなります。煙を貫く光は八つ。

「貴方を恐れるのです。宇佐見堇子」

煙管に彫られた波のような煙を吹く貝の絵が月光を反射して堇子の目を刺すように煌めき、少女は立ったまますっきり動けなくなっていました。

「今のは伝言じゃ」

マミゾウは背を向けて遠ざかり始めました。

「さらば。生きたまま壁に閉じ込められるお主に同情はせんよ。以後はふたつの庭を眺めて生きよ。どちらにも声はかけぬことじゃ」

足跡もつくらずに夜陰へ滑りこむように消えていったマミゾウの背中をぼんやりと見つめながら董子は現実へと覚醒していきました。そういえば闇の中でこちらを見つめるように燦り続けた煙管の火はいつまでも消えなかったようです。

董子の夢は変わりませんでした。憧れた未来都市の光。地を覆う砂という名の墓。もつれた羊歯と茨と祈り。幻想郷。

その全てが彼女にとって遠い哀しみのように受け取られましたし、最後のものに至ってはまず最初に身を隠すことから始めねばなりませんでした。今まで顔を出していた何処にも行くことはできません。その日も博麗神社からさほど遠くない山のなかにある少し開けた場所に董子は座っていました。自然か妖怪のせいで少し崩れた尾根にできたその場所で、ちょうどいい形に突き出た岩へよりかかって膝を抱えた少女の目に空は青く、風も陽もふんだんに降りかかってひしめいています。夢から覚めようとせず、かといって何かやるわけでもなく董子はその場所へじつと座っていました。

「自分の花を咲かせる事の出来る人は少ないわ」
いつの間にか背後へ立っていた幽香が声をかけると、

風に揺れた茎のように少しだけ背中を震わせて董子は自分の指を見ながら言いました。

「私をどうするの」

「手折られるとでも？ 私には関係のないことよ。前と同じ理由で私はここにいます」

風が止みました。日が雲に陰りました。

「花は自ら咲こうなどと考えはしない。欲望を満たしたから咲くのです。花鳥風月。嘯風弄月。月に叢雲。花に風。貴方は自らを満ち溢れさせようとしている。それは未熟でこそあれ傲慢ではない。貴方に合う花は董子よ。土に還るために咲こうとする花が私を呼んだ。理由としてはそれだけです。咲きなさい。貴方」

空が裂けて彼女たちを巨大な目玉が覗いたように思わ

れます。超能力で愛用の外套を呼び出すと震える身体へ巻きつけながら董子は立ち上がり、幽香へ振り向いて対峙しました。

「願いを」

幽香が微笑みながら問いました。

「外の世界が今すぐに結界を……いいえ。私が夢見た未来へ繋がるための結界制御法を、外の世界へ与えるために知恵を貸して」

「もちろんよ。私は花を咲かせる者」

幽香は董子の顔を覗き込みます。感情も思考もなしに広がる無慈悲な樹木の枝葉にも似た妖怪の瞳がゆらめき、董子は吸い込まれそうな気がしました。

「結界と人間が分かり合うことはありません。なぜなら

ばお互いのための言葉を持ち得ぬからです。ですが双方を理解する者がいるのであれば別。では現在、外の世界に棲む人間で一番結界を知っているのは誰でしょう？」
年古^{としふ}りた万^{ばん}朶^だの目を見返しながら予感に震えて董子は答えました。

「わたし」

「そうです」

「でも私は他の人たちに結界を説明できない。感覚として理解しているかもしれないけれど、伝えるための技術も言葉を持ってないわ。それを」

「それを私が与えることはできません。なぜならば私も幻想郷に住む身であることに変わりはないからです。この場所から結界に関する知識は持ち出せません」

幽香の手が董子の首筋に近い肩へ置かれた。土をつかむ根さながらに。

「答えはもう手にしているのよ。董子。伝える言葉を持つていない。ではそのための言葉を作ればいい」

董子の目に幽香とは別の樹が移り始めました。幽香の背後から天を貫くように伸びていく黒い幹。

「人間と結界をつなぐ言葉。双方の疎通を可能にする言葉。外の世界で中間言語と名付けられた、人間のための身勝手な言葉」

その樹の葉は肉厚で重そうに垂れ下がっていました。長く伸びた刃状の葉でした。針のように細くびっしり固まった葉でした。ひとつとして同じ葉、同じ枝はありません。いのちがみなぎって揺れやまない、高くはりのべ

られた黒色のゆたかな枝葉が天網のようになっています。

「それにお成りなさい。堇子。貴方はもう一度なったのですよ。この地で昼と夜を混ぜあわせた時に」

その木の名を堇子は知っていました。

バベル。

「開花の仕方を教えましょう。それから貴方の思うがままになさい」

こうしてまた、幻想郷に新しい花が咲くのでしょう。

うつそりと立ち上がった霊夢が庭を通って神社の裏手まで歩いて行ったのは名のない昼のことでした。広くなつた場所まで出てきた彼女は、そこで待っていた堇子の

前で立ち止まるとしばらく黙って相手を睨みつけてしまった。

「自分勝手にも程があるじゃない。次に幻想郷に来たらどうなるか分からないほど馬鹿な子じゃなかったはずよ。茶番はもう終わってる。前に言ったわ。私はどうあつてもこの結界を守る。そして人間を軽々しく死なせはしない」

「覚えてる」

「あんたは死なせない。死なせないから遊びで白黒を付けたげる。けどこれ以上は二度とこっちに来られないように処置をさせてもらうわ。まるで死んでしまうような。空も飛べなくなるし夢だって見られなくなる。そんな事を」

靈夢は五指の間から光る針を覗かせました。目が密やかな恐ろしい色で爛々と輝きます。

「私がやらなきやいけない」

こうして放たれた針と符を皮切りにして命名決闘が開始されました。鮮やかな遊戯にひるがえる紅と黄金の匂い。普段と変わらぬルールです。しかしどちらが人間でどちらが異変なのでしょう。何に対して二人の表情によぎる凄惨は捧げられているのでしょうか。

死のために遊戯を用いてしまった靈夢と董子は、この期に及んでそれでも相手のことを人間として見ていたのでしょうか。

森を食らう魚のように靈夢は董子へ近づいていこうとします。触れ合うほどの距離になってしまえば靈夢の勝

利をもつて遊戯の雌雄が決することを、お互いが承知していました。こうして彼女たちが遊ぶのは初めてではなかったのですから。

空色をした鉄の旗と術性を感じられない奇妙な紋様のカードを董子は舞い踊らせ、伐り倒される大木さながらの石柱で霊夢を薙ぎ払います。風に吹かれた枯れ葉のように軽々と空中を転がっていく霊夢へ噛みつくように紅蓮の炎が後を追いますが、ひと回しされた大幣にぶつかると細かい紅鋼玉の粉のようにして熱塊は碎け散りました。その塵を貫くようにして放たれた霊夢の針が董子の外套の端を縫い止めますが、体に当たるはずの針は浮かび上がった葉状の岩板に受け止められました。

そして霊夢は陰陽玉を取り出します。誰かの笑みを頭

の後ろの方で董子は感じました。ことによればそれは自分だったのかもしれませんが。

投げ放たれた陰陽玉は霊夢にとつては真っ直ぐに、実際には曲がっていく雨のような軌道を描いて岩の葉をかわし董子に肉薄します。そして涙へ入っていく言葉のようにして、董子の左目あたりを撃ち抜きました。

小さな吐息が萌芽する音を董子の喉は鳴らし、同時に驚愕の叫びを霊夢はあげたのです。繰り出した陰陽玉が霊夢に伝える手応えは考えていたものよりも強すぎて、それこそ頭蓋を砕くほどだったのですから。しかし董子の撒き散らしたのを見て博麗の巫女は言葉を失いました。

少女の壊れた左顔の下から覗くのは血肉ではなく細い

無数の糸でした。それはただの糸ではなく結界線とでも言うべきもので、より合わされた境界をほぐしていったならばそうなるのであろう物質でした。糸はあとからあとから音を立てるようにして董子の痕から吹き出し、繭を作るように董子の未成熟な曲線に沿ってゆらゆらと広がっていきます。

手元近くへに戻ってきて浮遊している陰陽玉を収めるのも忘れて相手の様子を見ていた霊夢は、いきなり陰陽玉をその場で猛然と回転させて嵐の種じみた渦にすると、袖下から取り出した分厚い札の束を投げつけました。風の轟音と共に螺旋を巻いて吹雪のように吹き散る札がすべて霊夢の後方へ乱れ飛ぶと、乱れる白は空間の一角を削りながら共に消滅してゆき、そこへ広げられた傘を――

—その下に佇む者の微笑みを頭あらかにします。風見幽香です。仰け反ったままの董子から視線を外さず霊夢が幽香へ声を投げつけました。

「アイツに何を吹き込んだ？」

「あのスミレが咲くための方法を。そして失う物を。失い方を」

「宇佐見董子は見つけしだい動けなくしろって話だったはずよ。その後は私へ引き渡せとも」

「あの子は動いていなかった。引き渡しは、今まさに」
自らの勘が近づくかと告げるために董子のそばへ近づけず、霊夢はその場で躊躇しています。彼女の背中を見ながら幽香は続けました。

「我々が人型をとるのと大して変わらぬ理由で、夢のな

かの人間は人の形をしている。そこへ神の手先が、巫女が壊すための神祕を投げつけるのであれば花の種にとって幸いよ。種を止めると宣告してくれているのだから。身を投げ出した犠牲獣へ向けて。もしくは殻を破れぬ雛鳥」

幽香が笑います。

「親鳥がそれを助けたならば、雛は水を得るのでしょう」
「べらべらうるさい！」

霊夢はあらゆる得物を陰陽玉の乱気流に乗せ幽香へぶち撒けると、もはや迷わず感情の疾さで董子へ飛んで行きました。危険を告げる自らの本能をねじ伏せながら。全てを思うがままにする博麗の巫女として宣託を無意識に行っていたかもしれせん。

溢れ出る結界糸に比例して希薄となっていく董子の身体へ靈夢が触れる直前、二人の少女の視線が絡み合います。片方は貴獣の。片方は老人さながらの。尋常でない高さから落下していく衝撃に襲われた靈夢は、やがて董子の瞳を見ながら為すすべなく意識を失ってしまいました。

全天の夜が見えたのです。そこに地はなく踏みしめている何かが透明なために夜空の黒と星々が続いていて、遙か下方に僅かな物体の欠片が見えるのみでした。記憶の断絶の後に靈夢が立っていたのはまったく未知の世界で、見覚えがあるとすれば月へ向かうまでを過ごした宇

宙に近いようです。辺りを囲っているのも、透明な物質は仄かな光を放っており、それが暗黒から浮かび上がった霊夢自身のかたちを認識させていました。

手さぐりで壁の感触を確かめていた霊夢は深みからひとつの影がやってくるのを見ていました。星の光をよぎってくる黒い点は大きさを増していき、ひとつの見慣れたシルエットになると螺旋階段を登るような動きをしながら霊夢と同じ高さまでやってきたのです。壁を挟んだ向こう側まで来た影——董子はそこで初めて霊夢に気づきました。

「来てたんだ」

壁を通しているにも関わらず董子の静かな声は流星のように真つすぐ霊夢へ届きました。

「永く待たせた？」

「いま来たばかりよ。たぶんね」

「それは良かった。私は一万年ほどかかったから
時の無いここで数えたとするならば。」

堇子はそう付け加えます。ここから見下ろした虚空の
先あたりへ太古には星があり、そこには人間以外の動物
と被造物のすべてがあつたのです。幻想郷で糸を吐き出
し尽くした堇子は霊夢と同じように星へ現れると、存在
する全てを基にして透明な塔を造っていきました。太陽
が高度を上げるようにゆつくりと、しかし確実に。

この星は堇子の中にある広大な部屋でしかないのは本
人が一番良く知っていたので、やるべきこともすぐに理
解できたのです。えぐった大地と海に暴風雨を差し込み

塔としました。雌に流れる命の飲料と雄の生み出す命の飲料で模様を描き塔としました。黒瑪瑙の塔を砕いて日長石オライトの雲と綴れ織りにすることで塔としました。堇子の中で堇子ができることに限りはないようでしたが、何しろ途方もなく広いところだったのでゆっくりと進められました。

はじめから目指すべき場所はわかっていましたが、それでもなお膨大な工程が必要とされ、ついに目指すべき場所へ堇子はあと一步の所まで来たのが先ほどだったのです。

「これで人間は結界を学ぶための術を手に入れる。火を移す木の棒。水を運ぶための素焼き壺。オベリスクを造る天啓をもたらす酒を」

見えない段を一つ堇子は昇りました。

「他人のためにアンタが身を捨ててまでやる事ない」

挑むような霊夢の声に堇子はいつもの笑顔で咲きました。

「そうね。他人なんて大体どうでもいい。でもこれは私が見た未来のため。私の未来！あの美しい光景を作り出せる人たちなら、宇宙にすら届いてみせるでしょう。私も連れて行ってもらえるかな」

「子供は夢を見ていなさい。夢にくべられる木になるな！」

透明な壁に向けられて霊夢から鋭く放たれた札は、指を離れるとひらひらと真下へ落ちました。まるでただの札のように。堇子は顔を上げて霊夢を見ます。

「ここは私の夢であり貴方はただの人。博霊の巫女じゃないよ」

踊るような足どりで後ろへ傾いた霊夢は風の速さで董子と自分を仕切る壁を蹴りつけてよろけました。おどろいた董子は残されていた数段を素早く昇り、目に見えぬなにかを手中におさめて霊夢へ振り向きます。

「男子みたいなこととしてないで聞いて。霊夢」

何度も目の前を蹴りつけ荒い呼吸で胸を波立たせる霊夢が目だけを董子に合わせました。

「一人でここまで来る時によく考えていたんだけど。友達と遊ぶの、楽しかったねえ」

董子の自然な笑顔を見て息につまった霊夢がまばたきをひとつ。それで終わったのです。

博麗神社の居間から陽に照らされた庭先を博麗靈夢は見っていました。

居間へ横たわって掌ひとつ分だけ開いた障子のあいだから、見慣れた軒先とそこから広がる白い庭を靈夢は見ていたのです。流れ込んでくる冬の冷たい外気に朦朧を破かれながら、繋がらない記憶と現状を整理する間に訳も分からず少女は呼吸を止めていました。しかしついに限界を迎えて大きく息を吸い込むと同時に、自分が現実に戻ってきたことをどうしようもなく押し付けられて悟ってしまいました。堇子は行ってしまったのです。

悠然と半身を起こして座り込むと、手櫛で髪を梳くような気軽さで庭先へ一枚の札を靈夢は飛ばしました。障子の細い隙間を抜けて鳥よりも速く庭の雪上を横切って

行く札影をぼんやりと見送り、天から降ってくる陽へ視線を向けたままじっとしていました。やがてそばに落ちていた大幣を使って障子を開け放し、どつと流れ込んでくる冷氣にも眉ひとつ動かすことなく外を見回した霊夢は、ひとつの花が風に揺れるのを見つけました。

途端に顔を紅潮させて床を蹴り立てると、靴も履かぬまま空へ翔び立ち、その日は戻ってこなかったということです。

先述のようにこの本文は近代結界の黎明期から存在する中間言語『スミレコ』の内部で作成された『ひかりについて』の全文である。『スミレコ』の知性や意思の有無

についての議論は今でも研究の最先端に位置しており、ここで言及するものではない。作中に出てくる固有名詞は現在では全てフィクションであると証明されているものの、物語として不完全な点や背後関係の説明が一切ない点などからギルガメス叙事詩のように欠けた部分があるとみられ、以後の研究が待たれるところだ。なおこの発表以後、五十年近くをYは完全な沈黙を保っている。

幻想郷の桜の蕾が色を刷きはじめた頃のことです。宴を開かなくなって久しい博麗神社を訪れた魔理沙は、軒

先へ座つていた靈夢を見つけると声もかけないまま隣へ並んで座りました。

「どうする」

開口一番にそう言つた魔理沙は帽子を脱がないままです。

「どうもこうも。私ができることはもうない。人とそれ以外を繋ぐ言語なつたアイツにまた会えるようになったとしても、私が生きてる内には無理でしょうね」

盆へ置かれた急須から靈夢の手ずから緑茶を落とされる湯呑みの側へもうひとつ湯呑みが置かれました。魔理沙が懷から差し出したその新しい湯呑みにも靈夢はお茶を満たしていきます。

「どーも。するとワガママ娘に文句を言つてやるお鉢が

回ってくるとすれば私か？」

「する気もないのに適当なことを言わない。まあ、人間止めたいなら私が死んでからにしてくれる。アンタ絶対に厄介事起こすだろうし」

「お前しぶとそうだしなあ。こりゃあ私は三途を渡ることになるぜ」

鼻で笑う霊夢と可愛らしい笑顔を返した魔理沙は同時に茶を飲みました。

「アイツ。酒で酔ったこともなかったんじゃないかしら」
湯呑みの内側を見つめる霊夢から魔理沙は視線を外しません。

「そうだろうな。で、堇子をどうしたんだ。お前がこのまま引き下がる訳がない。冬に幽香をコテンパンにした

後からつるんで何してるんだ」

「教えない」

「私も混ぜろと言ってるわけじゃない」

「なら盗む？」

「一人消えた。もう一人は宴会から逃げるようになった」

魔女の声音に驚いた霊夢が顔を上げました。うつむいた魔理沙の表情は帽子の陰に隠れてよく見えませんが、すぐ隣に座る霊夢は別だったでしょう。鼻から深いため息を吐くと、手にした湯呑みを指先で数度叩いて霊夢はゆっくり微笑みを作りました。

「精密^{せいみ}ってわかる？ 科学の古い名」

霊夢の言葉の中にある何かが柔らかく変わり、したたかなようなそれを受け止めながら魔理沙は頷きました

「董子は結界と精密せいみを繋ぐ巫女になったの。でも巫女の口から告げられる言葉だけじゃまだ人間に理解しやすいとは言えないから、色々と式がいる。形式、儀式、様式。きつと董子はそこまで用意なんてしてないでしょう。だからそれを幽香へ作らせて外の世界へ——董子の存在に気づいて結界の制御に取り組んでる人へ送ってるの。彼らの式が使える形でね」

「古典的なギフトだな。悪魔がよくやる類の」

「霊夢は微笑みます。相手から聞きたかった答えと声が届けられたからです。」

「幽香が言うには人間の寿命より少し長い程度の年月をかければ、外の人間もそこそこ結界を操れるようになるんだって。その時までには折を見てちよつとずつつ式を作っ

ては送るの」

「すると？」

魔理沙は問います。その声音から察すると、すでに答えをうつすらと察しはじめているようではありましたが。

「するとね。ある日いきなり手を貸した分だけ溜まったお代を悪魔がいただきに参上するわけ。支払いをするのはもちろん董子。ところがアイツはあの始末でしょう。どうも魂は難しそうだったから記憶にしておくんですって」

うつむいたままにいる魔理沙の帽子が作る陰より下から覗き込んだ霊夢は、いたずらっぽいで質問者を見上げます。

「長い間ひとりだった奴が再び人や妖怪と話せるように

なつたとするわね。その時に初対面の相手が自分を知つてたらびつくりすると思わない？」

話の意味を理解するまで瞬きを繰り返した魔理沙の唇が急に釣り上がりました。

「なるほどな！ あいつの自伝でも世間へばら撒くつもりか」

「まさか。そんなつまらなそうな物よりマシよ。物語のヒロインにしてやるわ」

ついに腹を抱えて笑いはじめた魔理沙を見て勝ち誇つた顔の霊夢が湯呑みを空にしました。陽光の角度が少しばかり深くなったころ、いたずらっぽい顔の少女二人が顔を見合わせます。

「いつ頃やるんだ」

「そうねえ」

庭先にあるひとつの蕾を見ながら霊夢は頭をひねり始めたのです。

沙草

ひとひらの蝶が舞っていたかもしれない。それは血のリズムによく似ていたから、マエリベリー・ハーンは目を離せずにいる。一切の騒音と振動を感じさせない立体軌道電車の座席に座る彼女が見ているのは、膝上に投影された古雅な絵像のスキンで装飾されたホログラフィーだ。動画となって刻一刻と変わっていくスキンの風景俯瞰図は彼女の趣味ではなかったが、対面に座る情報共有者の宇佐見蓮子が最近気に入ったものらしいので好きに

させていた。

『美しい背中^{イデテン}』と名付けられた車号の中で広げられている文字情報は軽度ながら閲覧者制限がかけられている。車内には他の乗客も多数乗り込んでおり、そうおおっぴらに見せられる内容のものではなかったからだ。

二人が通う大学の講義についてか。はたまたどちらか、あるいは他者の密やかな感情の機微についてか。干支を回るか回らないか程度の歳になる少女たちが身内にだけ共有できる秘密を覚えるころだということを大人たちは知っているし、だから車内で閲覧制限付きの立体映像を見かけても気にする者などいない。だからそれが他のものより少しだけ複雑で、なおかつ結界そのものに手が加えてあるなんて誰も気づきはしなかった。

結界。メリーと蓮子は二人で秘封倶楽部というオカルトサークルを結成して精力的に活動していた。交霊会も秘儀の研究も行わないサークル。社会に組みこまれている結界を暴くという禁忌を犯すためのサークル。前世紀に世界を変えた技術である結界は既存の技術と融合する形で文化の隅々まで浸透していた。上下左右の軌道を取れるようになった列車しかり。ホログラフィしかり。その結界を自分の目で見る事ができるというギフトをメリーは受け取っていたのだ。

好奇心に満たされた少女二人がそんな力をどう扱うのか、想像できぬ者は本人たちも含めていないだろう。結界を暴いた向こう側へ広がる世界に蓮子とメリーが魅せられているのは紛れもない事実だったし、だからこそ先

日の失敗をどうにかしてやろうと躍起になつてもいた。

口は開かないままホログラフイの板書に情報と所感、他愛無い世間話を刻みながら二人は目的地へ反重力制御の振動に揺られていく。

事の始まりとして灰白く照らされた噂を蓮子が持つてきたのは二週間ほど前。午後の秋風が涼やかに日差しを吹き揺らしていた時だったとメリーは記憶している。葉上から夏が拭い去られていく街路樹の下を歩きながら、その時は周りに人もまばらだったので蓮子の喋る言葉に耳を傾けていた。

ホログラフ・ミラー

深夜の某所で立体映像鏡のあわせ鏡で作り出した向こう側、無限の遠近法の先に秘密があると噂は言う。光学の反射と反射が無限の先をこえて一步踏み出したとき、

見えてくる秘密があると言うのだ。続けて蓮子は似たような過去の都市伝説を挙げてから神話との関連性まで会話の構成に組み込んで、最後に『行こう』とだけ言った。

それまで倶楽部活動の指針になるメリーの直感もしばらく働かないまま、ずいぶんと暇を持てあましていた彼女は興奮を抑えきれない様子だった。それはメリーも同じことだったから次の日の夜には秘密を暴きに某所まで駆けだすように二人は向かっていった。

街筋に入って通りから通りを歩き渡り、やがて目的地の神社にある枯れた手水舎に着くと、海に近いのか潮の匂いがするようだ。メリーは言ったように思う。考えずに口から言葉をあふれさせる時が彼女にはあったからよく覚えていないのだが、啓示のような言葉を氣にした蓮

子が覚えていたので間違いはないようだった。池心に揺れる月のような静けさと夜のほかに蓮子は何も感じられなかったから『メリーのそういう言葉はよく当たる』と言い添えて。

二人は立体映像鏡を起動して向かい合わせた。鏡に映るのは互いの投影された鏡と少女と夜。反映像が連続して無限が積み重ねられていく。いや。重ねられた。メリーは見た。映像の極点に結界の裂け目が生まれるのを。立体映像鏡を構成する微細アモルファスと干渉材霧と電気をまとめている結界の裂け目ではない。メリーに知覚できない極大か、あるいは極小の結界の裂け目だ。少女たちは目を合わせてうなずいた。瞳に燃え立つ輝きは天炎に等しい。

そして行先で待っていたのは失敗である。いつものやり方で結界を超えた二人はどこまでも続く廃墟群にたどり着き、すぐに割れるような頭痛に襲われた。夢として結界の向こう側を訪れる蓮子も痛みを訴えたために、秘封倶楽部は即座に活動を切り上げて元の世界へ帰り、歯車が歪められた機械の駆動じみた気持ち悪さを胸に解散したのだった。

あの夜を許す訳にはいかない彼女たちは『美しい背^{イダ}中^{テン}』を降りて目的の神社へ、先日のお合^アわせ鏡を行つたのとは別の神社を訪れようとしている。あれから鏡にまつわる神様を探して目処を付けているとメリーの頭にギフトが送られてきたのだ。なんとも幸多き少女であることだと蓮子は笑い、メリーもいい気になって存分に笑った。ど

ちらにしる例の不幸に仕返しがしてやれるというもの。
救いを見出した娘が笑わぬはずがあるうか？

秘封倶楽部が活動を行ったのはまたもや夜。メリーの
ヴィジョンが示唆した神社と鏡と人影を追ってここまで
来たのだ。血から熱を奪う冷えきった夜の風を遮るよう
に蓮子はカーディガンを体に巻き付け、メリーが目的地
を見つけるのをじっと見ている。小波に似たゆらめきを
追っているのだろうか。つらなる水の流れが織りなすう
ごめきをすくい取るのだろうか。結界を見えるということ
を蓮子は知るよしもない。だからまた夜空を見上げてそ
の時間をつぶやく。

同じ夜の時間。ただし決定的に場所が違う夜の景色を
メリーは見ていた。見下ろした俯瞰図の先に広がるのは

どこかの山中で、梢もまばらな尾根の辺りを月が煌々と照っているために生い茂る草地は緑碧の世界となっており、季節のわからぬ風のなかでメリーは一對の目と互いを見つめ合っているのだ。

深い翠の草叢より腰から上を出している少女の形をした者は、お互いが握りこぶしほどの大きさに見える距離から不思議そうな目でメリーを見上げ、ときおり獣のようには毛深い大きな耳を震わせている。地上から見るとメリーが顔を出しているのはちょうど満月に重なる部分であり、光を背にしているにもかかわらずその姿は影に塗りつぶされることなく、まるで明るく丸い窓から外を見る人のようだった。

「こんにちわ」

「こんにちわ」

少し大きな声でメリーが言葉をかけると少女は嬉しうに笑って挨拶を返す。

「少しお時間いいですか」

「少しお時間いいですか」

さらに相手の少女が笑みを深めたときメリーは疑わしげに眉根を曲げた。自分の発した声を抑揚まで真似て返してくる相手に対してはごく自然な反応だったろう。

「私はマエリベリー・ハーン。貴方は？」

「私は。貴方は？」

言葉を返し終えた草叢の少女は呆けた顔でメリーを見つめ、それから自らの頬を軽くはたいて口を何度かパクパクと蠢かせた。目の前に置かれた空気を食いつくすよ

うに唇を大きく開閉させ、そのうち上半身と手足を旋風に舞う草のようにばたつかせてから、少女は倒れて草叢に全身を沈めた。するとメリーの口が勝手に言葉を紡ぐ。

「変な山彦ねえ」

距離のある相手に届くような音量ではなかったにも関わらず、少女は勢い良く立ち上がり喜色を満面に浮かべてメリーへ手を振った。彼女は山彦なのだろう。ようやく合点のいったメリーは、体重を預けていた結界の裂け目の縁から片手を伸ばして手を振り返す。すると山彦の少女は宙へ浮きメリーの目の前までやってきて楽しそうに手を振ったものだから、ついにメリーは声を上げて笑ってしまったのだ。その笑い声も律儀に山彦は返したものだからメリーはいつそう強く笑ってしまい、しばらく

夜空のなかで二人はずつと笑い転げていた。

「貴方は自分からは喋れない山彦なのね」

落ち着いたメリーがそう言うたいへん不服そうに山彦は首を横へ振った。

「じゃあ。今だけ喋れない山彦？」

何か反論じみた動きを山彦の唇は描いたがそこから全く音は出てこず、最後に少女は氣落ちした様子で頷いた。自分のせいかもしれないと考えたメリーはそれを相手に伝え、なぜ自分がここにいいのかをできるだけ詳しく話して聞かせた。ときどき山彦が声を反射してくるのには辟易したが、やがてそれが詳しい説明を求めていたり固有名詞の意味を知りたいときだったりするのがわかると、説明はいつそう丁寧なものとなった。

満月の窓がずいぶん西に傾いたところにメリーの説明は
終わり、考えこむ様子を見せて山彦は首をいろいろな方
向へ傾けている。そして自分とメリーにどんな関係があ
るのかさっぱり分からないと身振り手振りで伝えると、
人間の服の袖を軽くひっぱった。

「一緒に来てくれるの？」

メリーの言葉に山彦は頷いた。山彦が何故その結論を
選んだのかメリーにはさっぱりわからなかったが、それ
でも彼女は山彦の両手を握り締めると窓から思い切り引
きずり込んだのだった。坂を転げ落ちるような、もしくは
草の波間へ埋もれていくような感覚のあとで二人は現
実の世界にたどり着いていた。

揺籃の中にいる感覚が抜けず神社の石畳の上で抱き合

って転がる二人を見ながら呆氣にとられていた蓮子はしばらくして二人を叩き起こし、メリーの夢のなかの出来事を聞き出した。こちらの世界の月はまだ高々と空の上に腰掛けている。事態が好転してるようにはとても思えない二人だったがそれでも期待を込めた視線を山彦に向けて、妖怪は真つ赤になつて照れた。

「この子の名前がわからないのは不便かな」

メリーの困った顔に蓮子は呆れた。

「あのねえ。メリー。ここは私たちの世界で」

言いながら蓮子がホログラフ・メモを起動すると山彦はおどろいて何処からか小さな符をひとつ取り出し、顔の前に掲げた。

「文明の利器があるの。貴方。文字が書けるならこの板

に書いてみて頂戴。——なにそれ。名刺？」

蓮子とメリーとホログラフのあいだを行き来する視線に合わせて掲げた符（スペルカード）を動かす、山彦の緊張した所作はしばらく続いた。

山彦の名は幽谷響子というらしい。浮遊する光学のメモ帳へおっかなびっくり記したところによれば、月を見ていたら生えてきた『まえるべりゐ』なる人間を見た時から自分は夢を見ているのだと考えており、いまも夢のなかにいるのだから何が起こっても不思議はないだろうという。秘封倶楽部は概ね同意した。自分たちだけが夢と現を行き来できるわけでもないだろうと考えて。

その夜が西の空へ立ち去るまで、彼女たちはお互いのことや他愛のない話を続けて別れた。まるで年頃の少女

のように。鏡作神を祀る神社を去る前に自分の縁^{よすが}として響子は袖紐の片方をほどいて秘封倶楽部へ渡し、メリーに伴われて元の世界へ帰っていく。再び夢のなかで会うことを約束して三人は夜明けに戻っていった。

復讐の船出にも関わらず秘封倶楽部の顔から緊張は抜けない。迎えられてやって来た響子も、この先には痛みが待っていると聞かされているために同じ顔をしている。

目の前には中へ浮かぶ一対の鏡。メリーは結界の裂け目が再び開いたことを確認した。三対の瞳がとらえるのは遠近法の消失点まで連なる光と影の連続面。誰かの鼻腔をくすぐる潮の香り。水面下に没したと錯覚させる月

光の直下。吐く息の白は泡。もしくは霜。連なる球状の水平線――。

どこまでも続く廃墟群に三人は立っていた。渦動状の太陽がひかえめな光を投げかけ揺らめく流動的な世界は、軽い頭痛の始まった秘封倶楽部にとって異物の烙印を捺してくる空間の坩堝るつぼだった。諦念が蓮子とメリーの顔に浮かびかけると、響子は二人の首筋に跳びかかって自分の胸に頭をふたつ押し付けた。外見からは信じられないような力で襲われた秘封倶楽部は響子の身体をもぎはなそうと思いきり暴れたが、頭痛の大半が軽減されていくのに気づくと動きがゆっくりとおさまっていき、水底から浮かび上がるような気持ちで響子を見上げた。

逡巡する山彦は指先をうねらせてから中空へ四角を描

き続ける。それが何を指しているのか気づいた蓮子がホログラフ・メモを起動させてちょうどいい位置へ移動させると、さらさらと文字がなぞられていく。

『このいたのような　はこはないか』

続けて響子は光で作られたメモを手で持つと同じパターンで動かしてから書き足した。

『わたしちを　おおうくらしいの』

ふたたび同じパターンかたどの動きで板が動かされる。直方体の面々を象かたどるようにして。蓮子が端末を操作すると板状のホログラフィは消え、代わりに三人を包むような形で立体映像が展開された。広い宇宙のスケールを表現するために空間全体を利用する講義で使用するホログラフィ・メモを、超統一物理学専攻の蓮子が使用していた

のは幸いであつたろう。響子にはつこりと笑つて立ち上がる。と立体映像に触れ、すると秘封倶楽部の頭痛は完全に消えたのだ。響子の指先が光の壁をつつき、前のものと同じように文字が書けるのを確かめると指を動かす。

『おとだらけのぼしょ　あなたたちにはきこえないの』
人間の娘たちは首を横に振つた。

『わたしはおとを　かえせる　ゆめだからうまくいかな
い　わたしだけだと　わたしにくるものだけ　かえせる
このいたは　ちからのかわりになる』

自信満々に輝く響子の顔と文字を見比べてながらゆつくりと秘封倶楽部は笑いはじめました。やはりそのとおりだつたというだけの事を無邪気に。確信を得た彼女たちは響子が聞こえる音の源へ向かつて歩きはじめた。

罅^{ひび}だらけの無為な路が整然と並ぶ廃墟群は以前の隆盛を思わせてはいるものの、統一されていない建築物の大光景であるために秘封倶楽部へ雑然とした印象を与えており一層の衰退を浮き彫りにしてしまっているようだった。元の風景を知らない者たちであつても摩滅と変色を想像せずにはいられない場所を、押しよせて抜けていく風へ混ざった小さな砂粒が道を飛び跳ねていくのを三人は見た。

赤い瘡^{かさ}を浮かべた大理石の壁面を見た。細部が摩滅して檻^{ぼろ}樓をよじったように見える美花の浮彫りを持つ扉を見た。欠けこぼれ執拗な亀裂に覆われた黒曜石の街路灯を見た。

立ち止まることなく言葉だけをかわして少女たちはど

こまでも伸びている道を歩いていく。やがて空を流れる湾曲した鰭雲が湧き出す地平線が見えるようになる、そこへまばらに広がっているのはより破壊の進んで小さくなつた建築物と、緩やかな起伏がつらなる砂丘だった。響子を北極星のようにしてまっすぐ進んできた彼女たちは立ち止まり、しばらく向かい風といつしよに流れてくる砂粒を受けていた。

「メリーはなんともないの」

境界を超えた夢の世界でも現実と同じような肉体に縛られている相棒を蓮子は気づかった。思えばここにたどり着くまで膨大な時間を過ごしたようだったし、曲がりくねりのたうつ太陽はちつとも最初の位置から動いていない。

「なんとも。まるで平気だし喉も渴かない。最初は少し疲れたように感じていたけど、今日は私もすっかり夢の世界の住人みたいよ」

汗ひとつかいていないお互いの顔を眺めてうなずくと、メリーは響子を覗き込みました。彼女も同じように疲れは見せていませんでしたが、不安そうな視線を返してきます。

「なにかあるの」

『ものすごいはずの さけびごえ みうごきするおとおちるおと わたしはいいけど にんげんはどうかかな』

蓮子とメリーは耳を澄ませたが何も聞こえない。音を跳ね返しているから当然のことだという顔をした二人へ響子は首を横に振りました。

『みみにはきこえないはず　おとはおんぱだけじゃない
にんげんは　ばか』

最後の言葉を記すと響子はいたずらっぽく笑ったが、
その口端は不安の暗い陰が心もとなく乗っている。山彦
の隣まで身体を乗りだした蓮子は咳払いをしてから大声
で言った。

「ヤッホー！」

「ヤッホー！」

目の前で山彦の大声を返された蓮子は目を白黒させ、
響子も驚いたように相手を見つめている。続けて蓮子は
怒鳴った。

「やまびこ」

「山彦は馬鹿！」

「！」

いつもの癖でアドリブのヤマビコを返そうとした響子は言葉を出せず大口をむなしく動かし、目の前で意地悪げに笑っている蓮子を見ると髪をゆすつて怒りだした。仲裁へ入ったメリーになだめられると二人は前へ向かう。まだ夢は覚めなかった。

砂に埋もれかけた道は少女たちが進んでいくとついに途絶え、乾いた風のなかで六つの足が膨大な砂地に足跡を刻みだす。響子を先導者にして進んでいく先にはただ空と砂があるばかりで、誰もいない景色の中で立体映像の檻に囚われていると同じ夢をぐるぐると繰り返しているような気がしてくるのだった。動き続ける身体。エネルギーの切れない立体映像端末。聞こえない叫び声。何も考えずに三人は歩き続けたが、ときおり誰かが声

をあげて会話を試みた。もしくは雑多な記録を立体映像に浮かび上がらせて喋った。そのたびに歩く以外の身動きと応答がひるがえり、砂へ吸い込まれていく。

進められた会話のうちで響子が呼び声について書き記したのは、三人が沙草のように見える千の丘の中を歩いている時だっただろうか。たどたどしい平仮名を用いて行われたのは響子にだけ聞こえる叫び声についてだった。秘封倶楽部の二人が生きてきた十数年の年月で人間が耳にする全ての呼び声の数よりも、遥かに多い声が聞こえるのだと彼女は言う。はじめてこの世界にやってきたとき二人がすぐに耐えられなくなったのは当然のことで、いま歩いているのは怒涛に自ら飲み込まれていくようなことかもしれない。響子が音を跳ね返そうとも人間には

少なからず叫び声が届いているはずで、もしこのまま蓮子とメリーが生きた年月を超える声を受け止めてしまえば秘封倶楽部はこのままここで終わってしまうかもしれないと言う。

それでも歩調は乱れずに続いた。

蓮子が四方の立体映像へ資料を流しながら常世について話したのは、視界の果てで燃えるようにして遙かな水平線を埋める、強烈な傾斜を持つ砂の山を越える時だっただろうか。古代人たちが海の向こうにあると信じた常世や蓬萊やニルヤといった場所について話すのは実にふさわしいことだと皆が信じたのも無理はなかっただろう。溢れる不可視の言葉の海をかきわけて彼女たちを呼ぶ声を目指し、廃墟と砂と風と光でできた波濤はとうをこえて向か

っているのだから。その異界がやがて冥界と混同され人間が使わない部分へ飲み込まれていったことについて蓮子は黙っていたが、砂が作った陰や自らの足元に溜まる暗がりを目にしたメリーと響子は何となくそんな気がしていた。

——言葉で消滅していくのは自然なことよ。

しばらく続く緩やかな下り坂の途中でメリーの唇が紡ぎはじめた言葉は雲の消えた空へ落ちていっただろう。

——ささいな言葉で出し抜けにこぼれ落としていく人。

聞こえた言葉に振り向いて自らを突き飛ばす人。人間を見たことがあるのかという疑問にただひとつの言葉で答えようとする人。ひとつの名前で揮発し、断続する言葉の中で消滅していくのが人間。だからこの夢のなかで私

と蓮子は消えていく。私が夢の住人になったのは、合わせ鏡の向こうから聞こえてくる万億の言葉によって私の人間が海の向こうへ送られたからよ。

メリーの言葉へ砂花のように微笑した。もしくは銀沙のひそやかさで憤怒を目端に刻んだ。どちらが蓮子でどちらが響子だったのか知るのは、舞い上げられた砂塵の先端だけだろう。

大きな砂漠に影が落とされて世界が正午に入ったところ、大陸に匹敵する広さの砂穴の底へ三人はたどりついていった。彼女たちのスケールでは感知できない下り坂の終わりでは膨大な砂が蠢き、地下へ飲み込まれていくのがわかる。三人の足は止まらない。振り返って下へ向かって転がる砂の勢いよりも速く坂を登ることは可能だったろ

うが、その先に少女たちの行き先はなかった。

歯車の刻む時間はもうこの世界から取り払われてしまっている。世界はすでに水と砂。曲がついていた。時も砂も熱も血も。

三人は立体映像の檻に囲われたまま速やかに飲み込まれていった。星の向こうから人が歩む速度で。絶え間なく殖えていく身中の細胞よりも速かった。底の底へ落ちるのは。

大瀑砂を落下する中で夢想が吹き散らされ。人間らしいロジックを真っ先に思い出したのは蓮子の方であり、ゆえに小さな悲鳴を上げてメリーと響子の肩を揺すった。そこに広がる光景は半ば想像し、半ば想像していなかったのだ。地の底へ至るのかもしれないという想像はあ

っていた。なぜならば遠くに見えるのはマグマの赤。莫大な熱をためた地核の光。

地の底から空へ飛ばされるとは思っていなかった。なぜならば砂とともに地核へ落ちていく最中の蓮子が視ているのは宇宙に浮かぶ石の雲と見慣れた星々なのだから。

「四時五七分一三秒！」

「四時五七分一三秒！」

大声をあげて時刻を詠みあげる蓮子の声に響子の山彦がこだまする。この声の連鎖に少し遅れてメリーは喉の奥で悲鳴を囁み殺す音を出し、目を見開いた響子はきよろきよろと辺りを見回した。

膨大な流砂が散り始めて明らかになっていく彼女たちの到達地点はまさしく地の底であり、割れて地核がむき

出しになった星の中心へ落ちていたのだった。進行――
落下方向から首を曲げて背後を見てみれば、自分の体の
脇を通って行く光の線が長く長く宇宙の黒へ向けかつて
伸びており、石の雲だと思っていたのは割れてしまい分
離しかけている地殻の数々で、多重の層が結合から剥離
へ至る途中なのが見とれた。夢の中にいるために目も潰
れず肺も千切れぬまま、砕かれていく星の解体模様をそ
れぞれの意識いっぱいを受け取っていると響子の全身か
逆立った。

無言なのも忘れて大きな口を開けながら秘封倶楽部の
それぞれの袖を引き、元来た方向を指差してのたうつ文
字を書く。

『だいちを　くだいたやつに　みつか』

二人が文字を認識する途中で響子は蓮子とメリーの腰を抱いて引き寄せた。溺れるものが手当たり次第に物をつかむように。

『みつかつた』

その女のようなものを見たとき、蓮子は先ほどの（もしくは数十年前の）常世についての話の中でちらりと見た根の国に関する資料を思い出した。海の果てにある常世の国と入れ替わる形で忘れられていった根の国。ネと呼ばれた国を支配する存在についての所見を。

落下していく光源を背にする形で女のようなものがあるのを三人は見ていた。夢ゆえに光とそれに付随する影に姿を塗りつぶされることなく、ゆつくりとその細部が明らかになっていく。

『あいつが おとだよ ぜんぶならしてる』

人にしては手が長すぎ、全ての指の数が違い、骨の付け根の位置がズレていた。当然ではあった。全てがツギハギだったのだから。破り取った写真を組み合わせて作られたような各部分は全て別人のもので、近づく度にその部品そのものがツギハギだと認識されていく。

ここが無限の合わせ鏡の先に見える世界なのをメリーは思い出した。それは噂であり、噂になるまでに多くの人間が某所で鏡を覗いたのだろう。その虚像は増幅され、増殖され、光学の反射と反射が無数の幻影を生み出し、その全てが継いで接いで注いで作られた魔だったかもしれない。

するとその物が立てる音の重なりも無限であり、無限

の音はどれだけの物を動かすだろう。三人はこれまでの道程を想起した。最初は廃墟があつた。やがて徐々に砂が全てを支配していった。音が碎いた物は何になるだろう？ 割って割って割っていくと微細な粒ができるはずであり、では大地から生まれた物が最小の形に姿を変えたならば――。

耳鳴りがはじまると、響子が怯えも頭わに立体映像へ手をつけた。するとしばらくのあいだ耳鳴りは収まったが、女のようなものの細部をもう一段階こまかく見分けられるようになるかと再び音が始まった。向こう側で手が上がりはじめる。無限の手を動かすことで生じた音が三人を襲い、ついに三人は轟音を聞いた。

頭蓋のたわむ音が全身の骨を伝つたために蓮子とメリ

ーはへたり込み、響子は齒を食いしばって全身を立体映像の結界へ押し付けている。四方の壁に罅^{ひび}が入った。

いまや女のような物を構成する欠片は人間の細胞よりも数多く見ることで、それだけ巨大なものを耳をふさいで見あげる少女たちの目には底ぶかい恐怖がうごめいている。それでも響子は音を反射し続けていた。その姿を見て蓮子はメリー側の側へ這い寄ると、体を曲げて彼女を押し倒し、覆いかぶさるようにして彼女の耳を塞いだ。両手の空いたメリーは亀裂を増やしていくホログラフィ・メモを操作して打開する情報を探しながら、自分だけが見ることのできる夢と現実の狭間を見つけようと必死になった。

しかし女のようなものの唇がふるふると震えるのを見

た響子は絶望のため息を漏らしかけてしまった。星を砕くほどの声が吐き出されて、ここまで近づいた自分たちに為す術などあろうはずがないことは彼女が一番良く知っていたからだ。息を吸い込む動作で結界に致命的な亀裂が這って行く。

そして女のようなものは言った。

〈所有する〉

ついに防ぎきれなくなった振動に結界が砕け散るのを、泥濘のようになつた時間の流れの中で響子は見ていた。このまま音に近い場所から身体が裂けていくのか瞬時に塵となるのか考えながら、冒険をとみにした人間の少女たちへ視線を移した。結界の壊れた衝撃に秘封倶楽部の身体は浮き上がりとしており、蓮子の頭からは帽子が

飛ばされつつある。本能的に音の反射を続けている自分より先に人間たちは消えていくだろうと考え、それでも何とか彼女たちを助けてやれないものかと響子は考えた。こんな夢に引つ張り出してくれたのは彼女たちだが、見たことのないほど不思議な夢と恐ろしい音に出会えたし、なにより今までこれほど他者から頼りにされたことはなかった。そのような妖怪ではなかったのだから。

この夢のなかで初めて響子は誰かを頼った。人間に頼られながら、この子らを救ってくれと両手に包んで差し出すようにして願った。

呼べば応えはあるものよ。

三人の背後に向かって流れている地底の長さほどある影がゆらめき、そこから足先が覗いたかと思うと一人の

少女が歩み出てきた。身体をすっかり覆う黒色の外套の裏地には輝く文字が走り、そのくせ起伏の少ない肉体がまとう洋装は響子から見ても古いものだ。眼鏡の奥にある賢しげな瞳はまっすぐに女のようなものを見つめており――そこで響子は初めてあたりの時間が止まっているのを知った。

現出した少女は歩きながら宙へ浮いたままになつてゐる蓮子の帽子をほっそりとした指で受け取ると、己の頭へかぶせて響子より一步前まで進んで立ち止まった。時間には止まっているものの音の残響は響子に聞こえ続けており、それらがつぶさに現状を告げている。

山彦の祈りをのせた土壇場の声はいくつかの偶然を経て彼女を呼んだのだった。ここが夢であること。砕け散

った結界物質には偏在する人造巫女が含まれていたこと。地核を背にした女のようなものから伸びる不可視の影は、幻影の集合体である魔の投影であり、それゆえに何人にもなりえる要素があつたこと。もしくは何人をも呼び出す縁^{よすが}になりえたということ。

傲慢な笑顔を女のようなものに向けた結界の少女は自らの目線あたりの高さで指を横に一閃する。それで全てが済んだ。天を衝く山よりも高い巨大な魔を覆うに足る桃色の裂け目が、相手の足元へ鮫の顎^{あぎと}さながらに開いて飲み込んだのだ。穴が開いて閉じるまでの時間は声が世界を駆け巡る速度と等しかったため、響子には一瞬で静寂が戻つたようにしか思えなかつたろう。

だが満足げな少女だけは何が起きたのかを知悉してい

た。女のようなものは放逐されたのだ。どこへかは彼女自身も知らぬが、おそらく星が砕けるほどの音を出したところで何も変えられぬ場所へ。

道端に咲く花が揺れた音に気づいた時のように響子へ振り返った巫女がにつこりとした。

再び歯車式の時間が動き始める予兆に空気が揺れると巫女は腕組みをしながら胸を張って消え、全き静止のなかで最後まで声を出せなかった響子を焼く地核の熱がおどおどと戻ってくる。

音に伸し掛かられていたためかそれまで全く感じることのなかった原初の炎は今や中心核のあたりに浮かぶ秘封倶楽部と山彦を焼きはじめており、続けざまに起こった出来事を理解する前に夢からの脱出を彼女たちは試み

なければならなかった。あまりに素早くたたまれる土壇場で混乱した少女たちは再びあがきはじめ、それが合図だったかのように夢の総体がよろけると、奔流となつて無数の星の囁き声が増殖していくのを皆が聞いていた。その中で一人くらは、出口となる境界線を見つけたし、ていたかもしれない。

ここは幻想郷の末端。もしくは中央。陽に照らされた寺の石畳の上を響子が竹箒で辺りを撫でていた。中から聞こえてくる小さな誦経を意味も考えずに口から出している山彦が肩越しに振り返ると、そこは思いがけず無人の庭が広がっている（気配など何もなかったはずだが？）。

過日に見た夢の名残はまだ彼女を孤独にしており、こうして日常に戻ってきた今でも一むらの驟雨のように響子を燦め^{きら}かせて去っていく。

口を開けかけた響子がまたも振り向いて誰もいない空間を見る。そこにいたのは二人組の少女たちか。もしくは一本の莖。淡い金を浴びてわれ知らず微笑んだ響子は、それきり見たものを忘れた。夢のようにして全部わすれてしまうと、この頃の響子は大声でひとつの物語を歌いはじめるのだった。

己の中でさゆらぐ火群^{ほむら}のようなこれらの声を歌っている響子を見て大方の者は首をかしげ、そうでない者は何かを思い出そうとするのが常だった。時おり不可解な笑みを浮かべる者もいるにはいた。

あるとき砕かれた結界の音が作り出した少女は音でできていたために山彦の中で未だに鳴り響いており、なによりも恩人である者にもう一度会えるような気がして響子は楽しそうに音を、ひかりについて大声で鳴り響かせるのだった。

「博麗神社の居間から陽に照らされた庭先をウサミスミレコは見ていました！」

無くした片方の袖紐も、いつか戻ってくるように響子
は思えてならない。

(終)